

「ヨーグルト」の国へやってきて

—ブルガリアでの留学生活のはなし—

The Country of “Yoghurt” :

A Story About My Life in Bulgaria

東京外国語大学大学院博士後期課程 菅井 健太

SUGAI Kenta

(Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies)

キーワード：ブルガリア、海外留学

はじめに

ブルガリアと聞いて、日本人ならまず最初に「ヨーグルト」を想像するだろう。そういう意味では、ブルガリアは日本では意外にもよく知られた国であるといえよう。しかしながら、そのブルガリアがどこにあるのか、どのような人々が暮らしていて、どのような言語が話されているかなど、少し詳しいことになると、たいていの人は首をひねる。そういう意味では、ブルガリアは多くの日本人にとってはまだまだ未知の国といえるかもしれない。

私はそんなブルガリアの首都ソフィアにあるソフィア大学に留学している。どうしてここにいるのか、どうやってここまでやってきたのか、今ここで何をしているのかということについてお話ししたいと思います。

留学までの道のり

私は現在、東京外国語大学大学院博士後期課程に所属していて、そこでブルガリア語の研究をしている。もともとはロシア語専攻であり、現在もロシア語研究室に所属している。ロシア語専攻の一学生であった頃に、たまたま受講したブルガリア語に興味を引かれ、大学院博士前期課程に進学した際に、ブルガリア語を研究対象とした。博士前期課程の時代には、ソフィア大学主催のブルガリア語の夏期講座に参加するために、初めてブルガリアを訪れた。夏期講座は、幸いにも参加費・生活費は無料で参加させてもらえた。それまでは文字通り言葉しか知らなかった国にやってきたわけであるが、

そこでブルガリアの人々や文化に実際に触れる中で、言葉だけでなく、ブルガリアのすべてに惚れてしまった。修士論文を書き終えて、博士後期課程に進学してからは、所属する大学の援助などを得ながら、国際学会や調査のために幾度となくブルガリアを訪問したわけであるが、残念ながら、長期滞在する機会を得ることはできないでいた。多い時は一年に二回もブルガリアを訪れておきながら、すぐに帰国しなくてはならないのが残念でたまらなかった。現地に長期滞在できれば、調査はもとより、多くの専門家が集まる場所で研究をすることができ、研究に関して直接指導を受けることもできるであろうからである。いつかはしようと思いつきながら、あっという間に月日は過ぎ去ってしまい、博士後期課程も3年目に入ったときに、なんとか奨学金を得て、長期留学を実現させるべく、動き出すことにした。そこで、ようやく重い腰を上げて、留学のための奨学金を得るための方法についていろいろと調べてみた。

はじめは、政府奨学金のようなものがないかと考えていたが、ブルガリアではそのようなものがないことが判明した。そのため、様々な財団が公募している海外留学奨学金に応募することに決めた。所属する大学が発出する奨学金情報を確認すると、留学を考え始めた時点で、いくつかそのようなものがあった。しかし、留学先の国や専攻する分野を限定するものも少なくなく、私が応募できそうなものは二つであった（のちにもう一つ）。そのうちの一つである、経団連国際教育交流財団が募集していた「日本人大学院生奨学金」で幸いにも採用していただいた。

しかし、ここからが大変であった。2年間奨学金を支給していただけることが決まったものの、そこから留学先の大学への入学手続きは全て自分自身で行わなければならない。私の所属する東京外国語大学は、留学希望先であるソフィア大学と学術交流協定をちょうど締結していたので、この協定を何とか利用することができないのかと漠然と考えていた。奨学生として採用していただくことが決まってすぐに大学の窓口にお問い合わせしたが、私が希望するような方法でこの協定を利用することができないと言われてしまった。ソフィア大学の知り合いの教員を通して事情を伝えて、協定を使わずに留学する方法がなにかないかソフィア大学側に問い合わせたところ、「この協定を利用できるはずだからそれを利用せよ」との返答があるのみであった。私はそのようにして板ばさみになってしまった。仕方ないので、別の方法を模索することになった。

大学の授業でブルガリア語を教わった先生を通して、駐ブルガリア日本大使を紹介していただいていた。直接事情を説明したところ、文化担当官の方をご紹介いただき、その方がブルガリア教育省や外務省とかけあってくださって、ソフィア大学入学への道が開けることになった。とはいえ、そのためには改めて、所属大学の在学証明書や成績証明書など、様々な書類を準備することになった。さらにはそれら書類の翻訳や公印証明も必要であり、手間が非常にかかった。何とか手続きを終えた後にも、一苦労待っていた。入学証明書が発行されるまで長い時間を要したのである。奨学金支給団体には、入学証明書類を一定の期限内に提出する必要があるが、それまでに間に合うか非常にやきもき

したのを覚えている。文化担当の方から、ブルガリア側にはその期限を伝えてあり、それまでに発行するよう伝えてもらっていたが、ブルガリアはとにかくこのような事務処理には時間がかかる。結局、期限には間に合わないであろうことがわかった。ちょうどこの時期に、国際会議のために出張でソフィア大学を訪れた際に、現地の指導教官となる方とお会いして事情を話したところ、事務とかけあってくださって、入学証明書はまだ準備ができていないが、入学が許可されていることを証明する書類を代わりに発行してもらえることになった。あつという間であった。そう、ブルガリアでは直接の知り合いであると何でも全力で助けてくれる。オフィシャルなつながりよりも、個人的なつながりを持つことはとても重要である。そのような個人的なつながりが、大きな力を持つことを改めて実感させられた。

暮らしてみても

すでに述べたように、ブルガリアにはこれまで国際会議や研修などで何度も短期滞在をしたことがあった。だから、ブルガリアについてはいろんなことを知っているつもりであった。が、実際にはほとんど何も知らなかったといっても過言ではない。やはり暮らしてみないと見えないこと、わからないことは多い。例えば、ヨーグルトの味である。こちらに留学で長期滞在するようになってはじめてスーパーに通うようになり、そこにあるヨーグルトの種類の豊富さに改めて驚かされた。そして、それらを毎日食べ比べることもできるようになり、ブルガリアで食べられるいろいろなヨーグルトの味を知ることができたのだ。そんなとき、大学時代にお世話になった恩師N教授の「モスクワにはアイスの味を試しに行くものだ」という言葉を思い出した（正確になんとおっしゃったかははっきり覚えていないが）。今のご時勢、インターネットやメディアの発達に加え、多くの外国人が日本に暮らすようになった。語学学習をするには、日本に暮らしながらも事欠かない。でも、モスクワでモスクワっ子が食べているアイスの味は、モスクワに行かないと食べられない。同じように、ブルガリア人が普段食べているヨーグルトの味は、ブルガリアに行かないと知ることができないのである。現地に留学するのは必ずしも語学学習のためだけでない、というよりもそれ以上にその言葉が話されている土地での生活や文化を直接目で見て知り、肌で体感するという点にも重要な意味がある。何を言いたいかというと、アイスとヨーグルトは現地で！ということである。

留学先の大学でのこと

だからといって、ブルガリアでヨーグルトの食べ比べばかりして生活しているわけではもちろんない。ここで、留学先の大学でのことについても少し紹介したい。

私は留学の大きな目的の一つとして、大学で開講されている専門に関係する授業の聴講と現地の指導教官との博士論文の研究の相談をすえている。残念ながら、現在所属する大学はもとより、私の知

る限り日本のどこにも、ブルガリア語学（言語学）の授業は開講されていない。かろうじて開講されているのは、ブルガリア語の語学の授業である、それも初級者向けの。それが意味するのは、日本ではブルガリア語学は独学するしかないということである。実際に、私自身も博士前期課程でブルガリア語学を専攻しだしてから、ブルガリア研究者のための夏期講座に参加したことはあるものの、基本的には独学で学んできた。幸いにも、そうするために必要な文献は存在する。しかし、現地の大学で体系的にこれらを学ぶことの重要性はきわめて高いことは言うまでもないであろう。つまり、大学で開講されている授業を聴講することで、自分自身の今までの知識を固めると同時に、不足しているものを補い、自分の中でそれらを体系的に整理することができるからである。これに加えて、指導教官の先生にはあらかじめ連絡を取って、時間を決めてお会いして、自身の博士論文のための研究の相談や議論もさせていただくこともできている。指導教官に限らず、どの先生方もはるかかなたの国からやってきた私に親身に対応してくださり、とてもありがたい。

大学外でのこと

私の留学のもう一つの目的は、方言調査である。私が博士後期課程に入ってから研究しているのは、ルーマニア領内で話されるブルガリア語方言である。かつてドナウ川を越えてルーマニア領内に移住した人々が、公用語のルーマニア語以外に、今も仲間内では自身のブルガリア語方言で話している村が存在する。とはいえ現在ではかなり同化が進み、ブルガリア語方言を保持するのはお年寄りに限られている。これらの方言は近い将来に失われてしまう運命にある。私が特に関心があるのは、言語接触による言葉の変化である。彼らは自身のブルガリア語方言はもちろんのこと、ルーマニア語も自由に操るいわゆるバイリンガルの人々である。彼らのブルガリア語方言が、圧倒的なルーマニア語環境の中にある中で、どのような影響を受け、どのように変化しているかを検討することは博士論文の研究テーマである。そのようなわけで、私の関心は言葉そのものにあるわけだが、調査のために村に通い、方言話者のおじいちゃんやおばあちゃんと交流を続ける中で、本来の目的とは違うことも見えてくるようになった。彼らの昔話に耳を傾けていると、本来の目的を忘れて聞き入ってしまうこともしばしば。おじいちゃんやおばあちゃんが、昔はどうであったか、どういう出来事があったか、彼らがどんな習慣や伝統を持っていたかということ話をしてくれる。ちょっと笑ってしまう話もあれば、大変な経験をしたつらい話もある。でも、そのエピソード一つ一つに彼らの全てが詰まっているような気がしてならない。時には気分がよくなると古い民謡も歌いだす。畑仕事しながらついつい歌っちゃうの、亡くなったじいさんによくおこられたものよ、と話すおばあちゃんの顔は楽しそう。そんな彼らの話を聞く中で、彼らが自分たちの文化や伝統を愛し、また言葉をこよなく愛していることに気づかされる。彼らの子供の世代はもちろん、孫の世代はまったくブルガリア語を知らないし、知りたいたとも思っていない。それでも孫にブルガリア語で話しかけるおばあちゃんの顔は寂しそうである。そ

こへやってきたのが、彼らの言葉を話す私である。何度か通ううちに、「また来たか！」と喜んで迎え入れてくれるようになり、しまいには「私たちの孫が来た！」とあって、果物の蒸留酒のラキヤを出してくれるのだ。彼らが決して裕福な生活をしていないことはよくわかるが、それでも私が訪ねると、（その必要はないのに）歓待してくれる。僕自身も本当の孫になったような気分になる。そのうちに、縁談まで持ち出されたときにはさすがに閉口したけれど。そんな今となっては、ただ自分の関心のためだけに彼らの言葉を研究するのではなく、そんなおじいちゃんやおばあちゃんが愛してやまない彼らの言葉を記録し研究することで、僕なりに彼らに対して恩返しをしたいというような気持ちが芽生えている。現代の世界で数え切れないほどの言葉が失われていることを考えると、ルーマニアの田舎の村で話されるブルガリア語の方言が一つ失われてしまうということ自体、たいしたことではないように感じるかもしれない。しかし、言葉が失われるということは、言葉だけが失われるのではなく、その背後にあるすべてのことが失われることを意味する。なぜなら、言葉は、話す人たちの文化、歴史、生活など全てを体現しているものだから。このようなフィールドワークをする機会を得て、改めてそんなことに気づかされる。

おわりに

ブルガリアは、南東ヨーロッパ、バルカン半島に位置する。いわゆるヨーロッパの国である。EUにも2007年に加盟している。日本人観光客に人気のギリシャやトルコと隣接している国である。ブルガリアの人口は、東京の人口より少ない。でも、ブルガリア人たちはみな自分の言葉に誇りを持ち、愛着を持っている。街中で私がブルガリア語で話すと、驚きとともに満面の笑顔で答えてくれる。今私はここで、ブルガリア語の文法構造だけでなく、いやむしろそれ以上のことを学ぶ機会を与えられているように感じる。留学は語学勉強や大学の授業で学べること以外に多くのことを学ぶことができる。例えば、ヨーグルトの味のように。ところで、ヨーグルトはブルガリア語ではヨーグルトではない。кисело мляко「すっぱいミルク」と言う。こちらに来てヨーグルトを食べてみて、納得した。ただの「ヨーグルト」ではなく、まさしくすっぱい「ミルク」だ。